

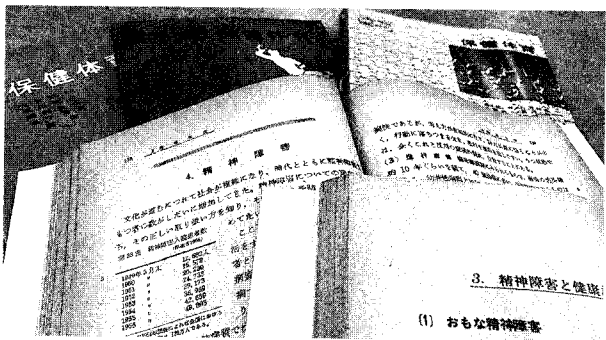
2018.10.29  
朝日新聞

# 「精神疾患」40年ぶり教科書に

## 高校・保健体育

2022年度から使われる高校の保健体育の教科書に、精神疾患の記述が40年ぶりに復活する。家族会や専門家らは「偏見の解消や早期発見につながる」と評価。現場の先生からは「まずは自分たちが学ばなければ」と声が上がるといわれる。

文部科学省が3月に告示した、高校の新学期指導要領。保健体育に「精神疾患の予防と回復」の項目がで、「精神疾患の予防と回復には、運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活を実践することともに、心身の不調に気付くことが重要であること。また



精神疾患についての記述がある、1950～70年代の高校保健体育の教科書

### 早期発見・偏見解消へ期待

## 現場の先生「自分たちも学ばねば」

疾病の早期発見及び社会的な対策が必要であること」と盛り込まれた。教科書会社はこれをもとに教科書を作る。

スポーツ庁によると、1978年告示の高校の学習指導要領から、中学も77年告示の学習指導要領から精神疾患の記述がなくなった。今回、高校の教科書で40年ぶりに復活することについて、同庁は「精神疾患に罹患する若者は多い。現代の健康課題の一つで、理解を進める必要がある」と説明する。

中学高校の保健体育の教科書を調べた中根允文・長崎大名誉教授（社会精神医学）によると、70年代後半まで、精神疾患について人権を無視した記述が多く見られた。患者らによる教科書改訂運動などを受けて、80年代に入る直前になって、偏見なく対応すべき疾患だとの表記が現れた。記述が消えた背景には、教科書改訂運動や授業時間数の減少などがあるとみられる。中根名誉教授は「偏見に満ちた記述は更なる偏見を生むが、知らないことによる不安や恐怖感も偏見につながる。今回、高校教科書に復活したのは評価できる」。

東邦大医学部の水野雅文教授（社会精神医学）によると、躁鬱病や統合失調症などは思春期で発症する人が多い。生涯に精神疾患にかかるとは6～7人に1人おり、75%は25歳未満で発症すると報告もある。「例えば統合失調症は発症して5年間の治療がその後を決める。早く気づき、専門機関を受診することが大事で、自分自身や周囲の健康のためにも、精神疾患の知識は欠かせない」と話す。

- ① 知識の提供
- ② 偏見の改善
- ③ 援助・受診行動の促進

海外の学校で、精神疾患や精神保健はどのように扱われているのか。

国立精神・神経医療研究センターの小塩靖崇・流動研究員（学校精神保健）によると、豪州や英国、カナダ、米国、台湾などでは授業で扱われている。

豪州は10年以上前から取り組む。「MindMatters」（中高生向け）という精神保健プログラムがあり、2010年当時で国内

### 海外での教え方は

の6割以上の学校で使われているという。生徒用と教師用のテキストがあり、生徒用には「いじめや嫌がらせとの関係」「ストレスとその対処法」「精神疾患の理解」などについて、それぞれ冊子が出ている。うつ病や統合失調症などの病名のほか、自分自身や友人が発症した時に気付くため、具体的な症状についても触れている。

英国では中学2年で精神疾患を「けなげ」と話す。（山下知子）